

3つの女性像をじっくり見て、比べて見てみましょう 〈6F、4F〉

ARTIZON MUSEUM



こくせん
《黒扇》
1908-09 年



てんびょう おもかげ
《天平の面影》
1902 年



とうとうざ
《東洋振り》
1924 年

Q1. どんなまなざし？

- ☐ しずか ☐ あか ☐ さびしい ☐ すすど ☐ やさしい ☐ かわいい ☐ おとな ☐ うつく ☐ 美しい ☐ そのほか

Q2. どんな衣装？どこから、そう思う？

- ☐ カジュアル (きがる よそお) ☐ フォーマル (せいしき ぎれいてき よそお) ☐ ヴィンテージ (ねんだいもの こうきゅう のような むかし よそお)
☐ トレンド (りゅうこう よそお) ☐ そのほか

Q3. 青色を探してみましょう！どんな青が使われているかな？

Q4. 絵の中に、動き出しそうなものはありますか？



ふじしまたけじ

藤島武二 1867-1943

ご自宅から大きな画像を見たい方は、作品検索より

作品タイトル（例えば「黒扇」）で検索！



作者の藤島武二は、慶応3年、薩摩藩士の子として鹿児島に生まれました。

1884年（17歳頃）に洋画研究を目的に東京へ出ますが、機会に恵まれず日本画を学びます。

1890年（24歳頃）より洋画研究を開始し画学校へ通いつつ作品を発表。

1893年（26歳頃）、三重県立尋常中学校助教諭となり津に赴任。同年、フランスから帰国した友人の画家、黒田清輝に刺激を受けます。

1896年（29歳頃）黒田らのグループ「白馬会」の創立に参加。黒田の推薦で東京美術学校（いまの東京藝術大学）西洋画科助教授に就任します。



《天平時代》^{てんぴょうじだい}は、初期の代表作の一つ。紫色の花が咲く桐の木の下に、古代の衣装を身に着けた女性が足をくねらせたポーズで立っています。手に持っているのは、東洋の古い時代の楽器、箏篋^{くご}。琴やハープのように、弦を弾いて演奏したそうです。

この作品を描く前の年、藤島は奈良県を旅して、正倉院宝物や仏像、仏画など奈良時代（天平時代ともいう）に強く惹かれていたことが知られています。また、この女性の片足に重心をかけて立つ姿勢は、西洋の古代彫刻に見られるコントラポストのポーズを思わせます。ここでは、画家のまだ見ぬ西洋へのあこがれと日本古代へのあこがれが溶けあっているのかもしれません。

《天平の面影》1902年 油彩・カンヴァス

1906年38歳の時、文部省留学生として、フランスに2年、イタリアに2年留学。

《黒扇》^{こくせん}は、イタリア留学時代の代表作の一つで、イタリア人女性をモデルに描いたものです。頭を覆う白いベールと黒い扇は、当時ヨーロッパで流行していたスペイン趣味が感じられます。スピード感のある筆跡ですが、肌や布地の透明感や柔らかさが、それぞれに描き分けられています。手の周囲や顔のあたりなど、影の部分には爽やかな青色が涼しげに使われています。藤島は、この作品を含む、イタリア留学時代の作品を生涯大切にしました。そして、亡くなる前年、それらを信頼するコレクター石橋正二郎に託したのです。その石橋正二郎が1952年に創設したブリチストン美術館が、現在のアーティゾン美術館のはじまりです。



《黒扇》1908-09年 油彩・カンヴァス

帰国後、教授となり、30年以上にわたって西洋画科の学生を指導。



《東洋振り》^{とうようぶり}は、東京で日本人のモデルに中国服（チャイナドレス）を着せて描いたものです。

藤島がイタリアの美術館で見たレオナルド・ダ・ヴィンチなどルネサンス期の女性像には、横顔のものが多くありました。

そして藤島は、この題材（横顔の女性像）には、中国服（チャイナドレス）が最適だと考えます。横浜の南京町（いまの中華街）で自ら入手したほか、中国の奉天（いまの瀋陽）の病院に勤務する友人に、希望のドレスのデザインや色彩などを具体的に指定して購入を依頼し、5-60着ものチャイナドレスを収集したといいます。西洋の美術に学び、その道具を駆使して東洋的な独自の女性を描いていま

《東洋振り》1924年 油彩・カンヴァス

Q. あなたなら、どんな人物画を描いてみたいですか？